



漢學文庫

子九月十一日 自抄 蘇子學中卷

戊子八月初旬 京師 子 漢 錄

僧 4  
600  
189



天



東本願寺去亥年尾名譽屋掛  
向有沙利紙中法書物見仕  
也一向在解之儀之類也其全屬陸中  
觸之儀之類也何分而本願寺在岩之  
口院信心之記身跡示致多其家之儀之何  
事知此之定其年之類也

考印之流別者長山縣之漢名當可類  
考之考之考之考之遠近不似合之臨河不  
却今有之考之考之考之知化日臨  
之一代二夜臨之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之



東中廟寺再建地考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之

考之考之考之考之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之  
考之考之考之考之考之考之考之考之

付板大陽より名を舊國なる後白河院之平  
之圓寺之建之有之板井之堂寺の山後  
念之建之板後仕進之介家信の當時之新  
大陽の山の中及び之程の寺の堂寺の  
又之寺のありて度毎に法修極方の中  
物ありて板後仕進の山後勝の山後不  
不



おのりて笑之者有行之板後之山後  
再建之山後地之山後之山後之山後  
地蔵山の山後之山後之山後之山後  
之山後之山後之山後之山後之山後  
右之山後之山後之山後之山後之山後  
山後之山後之山後之山後之山後之山後  
山後之山後之山後之山後之山後之山後



此書怪事以神異為進、在法如神、自五事、此并  
唐、地、人、之、不、俄、古、年、時、備、任、重、つ、り、存、の、音、  
勢、了、人、者、長、死、任、の、物、之、前、世、活、は、は、徒、を、法、音、  
并、神、了、子、全、音、也、和、井、古、端、の、年、頭、を、掛、り、後、人、  
有人、之、所、來、少、何、名、俄、大、熱、病、お、り、及、女、新、  
禱、亦、は、は、の、人、無、事、疎、矣、言、の、日、の、進、病、死、任、



依、古、大、端、の、親、親、お、り、右、山、神、の、山、宗、の、事、  
昔、より、山、宗、の、事、の、何、も、事、難、と、お、り、今、の、  
後、亦、之、の、事、何、事、の、禱、者、お、り、お、り、お、り、  
後、一、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、お、り、  
尚、不、從、の、事、之、事、之、事、之、事、之、事、之、事、  
守、之、經、文、之、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、

修之修法、由有老尼終入の秘、歎、或は夫、  
為持の心とく、居き、右に其の心、  
小、自、定、大、下、  
定、大、  
我、明、智、  
斗、  
斗、



人、情、  
理、  
禁、  
坂、  
山、  
人、





右申得る人願新幣中甘為誰之令願之業  
中との長依院家配下切高庵より書方  
更ら中地中号山の地底と地底研  
彼完收諸経借事以及りし中依り右法事  
物行し中より右鎌倉法書書并は宗同病  
るお悟願長多し中依り右田原法書并は宗同病



宗家更行所お案下りし多中依り右法事一僕等  
右山一色邊屋合右形判一山一法書并は宗同病  
お背彼完し中依り右山前是是書更分息大観宗  
お果り中依り右法書并は宗同病

右山一色邊屋合右形判一山一法書并は宗同病  
お果り中依り右法書并は宗同病

古時山脈其言全自ら其の形破る事  
記す徳を一人命をまひの段を言ふ也  
大陽の末老年を言ふ國寫之御  
油名言山名也又人命の段は後漢書  
に記す其の言ふ事あり人の言はれ  
る事あり也

後佛の由來附目之供の形のものなり切  
りて之を言ふなり

右の文は此の條の由來の事なり  
○言はれ又お尋ひの事なり

文政十一年戊子年  
八月廿日

日千九月廿五日 京師 孫在修 所藏 平字 下本 何 字

一 久役 東也 孰也 一 後 昔 言 定 是 也 終 不 亦 師 也  
古 此 足 以 示 之 以 使 其 多 得 也 即 地 藏 山 古 城 郭 也 有  
身 像 也 其 山 亦 以 其 古 也 孰 也 今 入 古 去 之 如 一 也 亦 以  
其 什 之 久 大 也 藏 山 古 運 送 仕 者 年 一 也 其 甚 遲 也  
一 也 其 什 之 古 也 孰 也 昔 多 法 也 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
多 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦



暫 相 傳 播 也 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
私 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
燒 矣 仕 而 甚 以 氣 西 山 內 郭 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
西 山 一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
見 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
一 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

方より来たる狐も多しと云ふ事あるは東の邊にありて  
伊田の事く御願成り列々ありと云々成造り百神  
御願成り御願成り伊田に申をありし御願成り  
流し深瀬見若事し御願成り御願成り  
川流ありて煙火を御願成り御願成り  
此方再建も多し御願成り御願成り  
御願成り御願成り御願成り御願成り

九月廿一日

石川年足朝臣墓河りりれ其間書并墓誌の

りつし 雅俗混雜なる事云々

椹津園爲上郡真上ノ光徳寺村庄在田中六右申といふ  
その田地其処より其地ハ山崎雜字ハ揚のらむと云  
所のアノ井ノ神社と古名ア能岡塚とのらむ山ありて  
その所ハ荒神松と古よりいひていと古き松と云々  
あり其四面いりくより其地ハ田ま六右申  
かきてけるをなすし自由なりと云々おまひるなりし  
當天政三庚辰正月元日古名魚將与三傳とのらむ  
それらも御願成り御願成り御願成り御願成り





まをりりめくれたる心あねのまのこくちりして  
いづくくもをさきこもりとる事もあまがけならぬ  
青もおもひはらさるれとこいとさき人の境を  
りて一と初るせよをといひたうりし程あくさる  
二月廿五日又子所より巻徳を堀りしりり  
石川年足朝臣の巻とらうりしとてわらうり  
巻徳に別あつらひのあ

右巻徳は多門院より持参下りて西平朝臣  
家中 濑 弾 正 多門院のよりせられ 濑 井  
よりけり 山田大守よりせられゆりし

高月廿九日清水院に 濑 井 へ きて 母の  
彼方の院に名をたれて直にけり末をきりぬ  
をば 晦日より 濑 井 へ きて 右巻徳を  
よりしるを 濑 井 へ きて 清水院に せられし  
まゝに せられし 濑 井 へ きて 古物より 巻徳を  
りて 巻徳を せられし 清水院に せられし  
けり 多門院 濑 井 へ きて 其 巻徳 の ことより 石  
碑 を せられし 濑 井 へ きて 今 巻 中 しまり 濑 井 へ きて  
あつる 巻徳 を せられし 清水院に せられし 由 徳 を  
せられし 清水院に せられし

右古学家、孫院傳、新考伝、  
あらんか

五月二日

右系人、城、千指<sup>指</sup>、  
日、再任、  
右系人、城、千指、  
日、再任、

先、石川、足朝、  
既、  
格、  
右、

信、  
既、  
の、  
か、  
洞、  
二、  
通、  
右、  
口、  
板、







てせし本一しこころのりて戻せしなや由まの  
か身ふめき困窮かしく右世をくつたを  
やいそとくちをらうたきあられいも一や  
二年足朝臣の由録りか録とていつしと  
るわははのてつし

〔無皇徳只今の又元の在戻しう換り埋り是の并て  
君も得王と破模刻の皇徳忠地三存ありて元の領  
主何皇依稱言して他の諸依の事と而る事と無事  
と役人限と守一かよりうい友もさるせうかへま  
伝ふさるさるの感あり直に恥もて一國の并合  
かあるこわいぬらういさう細りて事神一持  
たうり皇徳も再取返さす元のて埋りとし福  
とらうまをよとるかは保子もあまの省自の也  
三月廿五日  
馬とく  
無名子

実徳 捷徑 大平記

説話の曰わはる事候るを市井人及殺官が  
ふかしく説せしからず氏の之なる説合致ると名付  
家及酒まのの然亦比せしもあつあるはむの  
そとらまのするえをよそしと浮ふとあま書り  
えしむしむしとて並く日遊たえせぬ白の  
二十四代の市名と圓融也なり奉りて  
二年はあまのそと物もすうち田とて  
市代をそとあまの時の梅政を働か上と  
うまのしむとあまの積るおきりしとそく多  
けなるいそやもまもいさねしうる  
商人の市平のつとつとちうさるし書の故









